

『アルファの淫欲、オメガの発情』

著：高月紅葉

ill：minato.Bob

「ようこそおいでくださいました。ゲラシム殿下」

フェドートがそばに片膝をつく。書棚の前にいたキリルも同じように振る舞った。ここでは仰々しいぐらいの作法だったが、おかげで机の陰に隠れることができる。

「おおげさなことはやめろ。フェドート＝ウルリヒ教授だな」

「はい。このような場所までわざわざお運びいただき……」

「明日の予定だったが、都合が変わったのだ」

口を開いたのは、扉を押さえていた男だ。ゲラシムの侍従だろう。艶やかな声は主に似て響きが良い。

「専門的なことよりも、投薬のプランの根拠を聞きたい。殿下は医師の投薬が王妃の体力を奪ったのではないかと考えた。陛下の承認を得る前に、そのあたりの説明を」

予定より一日早くやってきたのは、不意を突くためだろう。準備のない状態でどれほど説明できるかを確かめる意図があつてのことだ。

研究室に任したとは言え、実際に案件を受け持つのが教授でない可能性まで見抜いている。

「それでは、お作りした投薬プランをご覧くださいませ。キリル、飲み物を頼んできてくれ」

逃げ出すきっかけを作ってくれたフェドートの言葉に従い、キリルは素早く立ち上がった。ゲラシムは実験用機の反対側へと案内される。

端正な美貌の王子としてだけでなく、寛大な人格者としてもゲラシムの人気は高い。研究所への視察も定期的に行っているし、国内の福祉を充実させる団体への寄付も惜しみない。そのどれもを自分の目で見て確認する生真面目さはだれもが認めるところだ。

「エラスト。おまえが行って来い」

涼しげな声が凜と響く。フェドートとキリルは同時に緊張した。

「この研究室で手が空いていそうなのは、キリルという男だと聞いて来た。その男が母上の投薬を担当するのだろうか？」

「彼は助手です。プランについては、わたしが責任を持って……」

「そういうことを言うと、後で手柄を渡すことはできないぞ」

ゲラシムはおもしろがるように笑い、扉を閉めたばかりの侍従をあご先で促した。男が一礼して部屋を出ていく。

「おまえがキリルだろう。ウルリヒ教授が施設から拾ってきたらしいな。出どころは怪しいが、優秀さを否定する所員は皆無だった。サルトイの姓はウルリヒ教授の奥方の家系だな。養子に入る前の情報が残っていないのはどうしてだ」

「彼は孤児です」

フェドートが答える。

「施設を対象にして行われる潜在的知能テストで拾い上げられました。わたしに勝るとも劣らない男です」

「母上に関することを売名に使われるのは不愉快だ」

ゲラシムは強い口調で言い放つ。キリルは後ずさって、こうべを垂れた。

フェドートは目の前のイスを引き、ゲラシムに勧める。

「おっしゃる通りでございます、殿下。お噂通りのご慧眼でいらっしゃる」

ゲラシムが座るのを待たずに書類を机に並べた。押しの強さは父親譲りだ。

「これはすべて、キリルが作りました。こちらがこれまでの投薬と治療などに関する検証結果。それを元に集めた、想定される病と症状の情報。導き出された投薬プランは三種です」

「で、医師の投薬に不備は？」

イスに腰かけ、長い足をもてあますように組んだゲラシムは、机を指先で叩いた。声はキリルへ向く。

「責任の追及は酷です」

フェドートが答えたが、

「あの男に説明させろ」

ゲラシムから冷たく退けられる。キリルは視線を伏せた。王族に対して視線を控えることは礼儀のひとつだ。

それがありがたい。フェドートが言った通り、ゲラシムは生粋のアルファだろう。アルファ性の人間と会うのは初めてだったが、離れていてもそれがわかる。

心臓が高鳴り、肌がいっそう熱を帯び、心乱されるのに安堵する。オメガの本能なのかもしれない。強い雄を前に、畏怖と尊敬が混じり合って苦しいほどだ。

キリルは緊張した面持ちのまま、口を開いた。

「……投薬を進めることによって、責任のあるなしははっきりします。処罰をお考えでしたら、それからでも遅くないと存じます」

「どういうことだ」

ゲラシムの声に厳しさが増す。しかし、キリルは続けた。フェドートには言わなかったし、書類にも残さなかったが、疑問はキリルも感じていたのだ。

ゲラシムがここに来た理由も、それを秘密裏に探りたい思惑からだろう。王妃が暗殺されようとしているかどうかだ。

「医師の判断に責任を負わせることは、今後の各種治療の萎縮に繋がります。ですが、殿下のご心配の通りであれば、こちらで作りました投薬プランに現れます」

「おまえも疑っているということだな」

「杞憂である可能性もあります。王妃を担当した医師は優秀な方ですし、経験も豊富です。ただ、王妃の祖国には、こちらではまだ知られていない病もあるとのことですので、やはり慎重になられた方が」

「フェドート、おまえはどう考えている」

「すべては彼に任せていますので」

声を掛けられたフェドートはさらりと逃げた。手柄に固執する教授なら、自分の発案だと声高に主張

する場面だ。

ゲラシムは不思議そうに首を傾げ、フェドートとキリルを見比べた。

「なるほど。ウルリヒ教授の愛弟子ふたりか。いいだろう。結果を待つことにする。フェドート、弟弟子の功績を急ぐなよ。キリル。おまえなら、医師の投薬の意図も読めるということだな」

「時間はかかりますが……。最重要課題は、王妃様の体力気力をお戻しすることと心得ています。プランが認められ、実行されるまで、どうぞ、お平らかにお願いします」

「キリル=サルトイか」

口の中で転がすようにつぶやかれ、キリルは内心で怯えた。アルファの声はまるで脳髄を痺れさせる麻薬のように深く響いてくる。

理性がぐらぐらと揺れ、足音が近づいたことに気づけなかった。ゲラシムの行動は、フェドートでは止められない。

ただ近づくだけなら、なおさらだ。

気が付いたときにはあごを掴まれていた。顔を隠す前髪が指で分けられる。一瞬だけ視線が合い、キリルは射すくめられたようにからだを硬くした。| 凛々しいゲラシムの眼差しが顔をじつくりと観察していく。

「殿下。キリルは人見知りの激しい性質なのです。どうぞ、おからかいになるのは……」

頃合いを見たフェドートの言葉に、ゲラシムは冷笑を浮かべた。尊大な態度だが、それが見惚れるほどによく似合う。

「いい匂いだ」

キリルにだけ聞こえるようにささやき、あごから離れた指先で喉元を撫でられる。立っているのがやっとのキリルは、ごくりと生唾を飲んだ。生まれて初めて感じる本物の欲求に、下半身が激しく脈を打つ。

「フェドート。ウルリヒ教授は、オメガ保護の研究をしていたな」

振り返ったゲラシムの言葉は、キリルだけでなく、フェドートのことも凍りつかせた。研究をしていること自体に罪はない。だが……。

「キリルは本当に知能テストだけが理由で拾われたのか」

「殿下！」

フェドートが駆け寄ってくる。

「ベータの人間にオメガの疑いをかけることは、最大の侮辱です！ ましてや、キリルは父の後に続く優秀な人材です。……お気を悪くされたことがあるのなら、処罰はいかようにも。しかし、オメガの疑いだけはお取り消しください。彼の今後に関わります」

キリルの腕を掴んで両膝をつかせたフェドートは、自分も同じように謝罪の体勢になる。

「ここが密室だから言っただけだ。だが、私も瑕疵性オメガの発情に居合わせたことぐらいはある。研究所の人間は堅物揃いだろうが、宮殿には悪所通いを好むものもいる。この匂いをさせて来るなよ」

「……ご忠告、痛み入ります」

フェドートは震える声で答えた。王族に対して真実を偽ることは重罪だ。それでも、キリルをかばってくれる。

「匂いの原因は、研究途中の強壯剤ではないかと思います」

「そうか。それは悪かったな」

見下ろしてくるゲラシムはあきらかに笑いをこらえていたが、それ以上は問い詰めずにその場を離れる。戻って来たばかりのエラストに声を掛け、そのまま研究室を出て行った。

「フェドート。あなたにまた嘘を」

「そんなことを口にするな。嘘ではない」

オメガの発するフェロモンを一般化できれば、と強壯剤開発の構想を立てたのはウルリヒ教授だ。オメガの性的魅力が際立ったものでなくなれば、『差別』は単なる『区別』になる。

「もしもゲラシム様がアルファだとしたら……」

キリルの言葉に首を振ったフェドートが立ち上がる。

「トリフォン様もアルファだ。第一王子でいらっしゃるし、継承権の順位は妥当だろう。だが……」

もしも王妃が自分の子が王位を継承することを望んでいるとしたら。事實はそうでなくても、第一王子が疑念を抱いているとしたら。

「ゲラシム様はトリフォン様と比べものにならないほどの人格者だ。おまえのことも見逃してくれるだろう。……それはそうと、キリル。あの書類は完璧だから、疑惑については今後もおくびにも出さずにいてくれ。……いつ気づいたんだ」

「初めからです。医師の診断を精査している段階で疑問が生まれました」

キリルもその場から立ち上がる。ふたりは手近なイスに腰かけた。

「なぜ言わなかったんだ」

「……政治が絡むことに関わるのは危険だからです」

「本当に優秀だな」

「どのプランが採用されても、真実は露呈します。王妃様は南の国の出身なので、おそらくは冬の気鬱のせいで精神を病まれてるんでしょう。……この国の医師には診断が難しい」

キリルは肩をすくめて笑った。人間が得る病のほとんどは気持ちからくるものだ。

「おそらく宮廷医師会は『プラン3』を選ぶはずですよ。そうでなければ、資質を問われる問題です」

「ん？ それは……」

書類を取って戻ったフェドートが他のプランを見直す。

「宮廷医師会は、いままでの経過を熟知していると仮定します。その場合、『プラン1』ならばこのラインの投薬が、『プラン2』ならばこのラインの投薬が問題となります」

王妃の身に害はないが、少々荒療治になる。

「もしもこのふたつのどちらかが選ばれたらどうするんだ」

「投薬プランはあくまでもプランです。経過審議のたびに微調整を加えれば問題ありません」

「医師会は2を選ぶと思うんだが」

「……そうですね。その場合は、この投薬が無効の結果になると思います。王妃様の祖国の主食にはこれに対抗する栄養素が多いんです」

「まるで謎解きだな」

「必ず回復していただきます。研究室の沽券に関わりますから」

「最終的にはキリルの手柄にして教授職に推薦するよ。そうしたら、わたしは雪山に入り浸りだ」

「……名誉教授に昇格なのでは」

「なに。それは困る」

ますます身動きが取れない国宝級の扱いが待っている。

「僕が教授になれるような奇跡が起これば、中級クラスの山には登れるようにしますから」

「早めに頼むよ」

大きく伸びを取ったフェードートの視線が窓の外へ向く。ちらちらと、淡い雪が降り始めていた。

\*\*\*

キリルの自宅は、高級住宅街のはずれに建てられた薬学術研究所の独身寮だ。

三階建てになっていて、各部屋はじゅうぶんに広い。一階の隅にある部屋で作り出す蒸気が建物内を巡り、暖炉ほど暖かくはないが長い冬もそれなりに過ごせる。トイレと風呂は各部屋にあり、台所は兼用だが、自炊する住人はほとんどいない。あたためる程度のことなら、オイルヒーターの上で済ませてしまうからだ。

発情期の間はキリルも同じようにして食事を取っているが、そうでないときは歩いて五分の場所にあるウルリヒ家の屋敷で世話になることが多い。

ウルリヒ教授を追いかけるようにして奥方も不在になったので、屋敷に残されているのはフェードートと四人の弟妹たちだ。あとは使用人が数名。

みんないい人たちばかりだから、キリルはいつそう距離を取っている。人付き合いが苦手だと思われる方が、人間関係はうまくいく。下手に近づきすぎると、発情期前後のフェロモンでさえ危ないからだ。

そう思うと、フェードートの性欲は淡泊だ。人並みに自慰はすると言っていたが、女よりも雪山の征服に燃えるというから、根本的に学者らしい偏屈ものなのだろう。

フェードートが届けてくれたクッキーをかじり、キリルは朝昼晩と飲まなければならない抑制薬を口に含んだ。水で流し込み、窓のそばへ寄る。カーテンを開けると、街灯にはまだ火が入っていた。

そろそろ、街灯も消える季節になる。冬になれば積雪が増え、街灯をつけるまでもなく雪明かりでこと足りるからだ。

寮の敷地内に植えられた落葉樹はすでに葉を落とし、寒々しい姿で道路へ影を伸ばす。向かいの家の常緑樹も色をくすませていたが、いまは闇の中だ。町は静かに雪化粧を待っている。

気泡の含まれたガラスに手を押し当てたキリルは、その冷たさに息を洩らした。それと同時に、冴え渡るようだったゲラシムの眼差しを思い出し、ぶるっと大きく震えた。

頭の中から追い払おうとかぶりを振ったが、まるでうまく行かない。腰がじんじんと疼き、あの日は研究着で隠されていた場所が熱を持つ。

発情期が来て三日目。もう何度自慰をしたか、わからない。

そのたびにゲラシムが脳裏に現れた。自慰の最中に高貴な第二王子を想像するなんて畏れ多いことだ。そう怖いでもなお股間は冷めなかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>